慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	仏蘭西経済学に於る価値論の発達（二）
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.8 (1924. 8) ,p.1122(58)- 1139(75)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240801-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

た。

（一九二四年七月稿）。

佛蘭西經濟學に於る價値論の發達（二）

津田誠一

七

Anne Robert Jacque Turgot（1727-1781）の經濟學上に於る代表的著作は一七六六年脱稿、一七七〇年發刊の "Reflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses" なる事衆評の一致する所なりと雖、其價値論に關する蘊奥を披瀝せるものとしては寧ろ同年代の執筆に係る未定稿 "Valeurs et Monnaies" を擧げざる可からず。顧るに前掲 Galiani に於ては使用價値と交換價値との區別は唯だ仄かなる暗示を存するのみにて未だ甚だ明瞭なりと云ふを得ず、Quesnay は "valeur usuelle" 及び "valeur vénale" なる名辭の下に判然之を識別すと雖、然も前者研究の必要を無視して專ら考察を後者に限局した。吾人は Turgot に及んで始めて兩者の偏頗無き取過を見る。彼の所謂「鑑賞價値」"valeur estimative" 並に「評定價値」"valeur appreciative" 是れである（Valeurs et Monnaies, Collection Guillaumin, Oeuvres de Turgot, tom. I. p. 72 et seq.）。蓋し其意を忖度するに使用價値を指して "estimative" と呼ぶ所以は、是れ其便益の熟知せらるゝ某々の物件に對して吾人各自の與ふる個々の鑑賞の成果たるが故にして、交換價値を稱して "appreciative" と爲す所以は、其が幾多の鑑賞相會し辯駁妥協の結果單一の決定的價格に融合するが故である（Turgeon: La Valeur d'après les Économistes anglais et Francais, p. 373）。

彼れは先づ「鑑賞價値」則使用價値の性質の究明より出發する。以爲らく「凡そ諸般の貨物は吾人の享樂、吾人の欲望滿足に適當すと思惟せらるゝ限りに於て」價値を具有する。此價値は Turgot は附言して云ふ、「商業上の價値とは寸毫の關係無く發生し得るものである」。換言すれば其は價格と異り孤立單獨の人間に對してすらも、交換と離れて存在するものである（Valeurs et Monnaies, Collection Guillaumin, Oeuvres de Turgot, tom. I. p. 80.）。即ち孤立人が其享樂に適合すと判斷したる貨物を求むる時、其認知したる夫々の適合性は、Turgot に從へば、獨立に之を價値と稱して宜い。乍併此價値は斯く貨物各々に就きて單獨に成立し得れども、然も他物の價値と比較するにあらざれば之を秤量表現する事不可能である。「鑑賞價値」則使用價値は此比較の結果二個以上の貨物の間に、尊重の順位を定め等級を立つるに依つて發生する觀念である。其は「人間が其欲求する種々なる貨物に對して附加する尊重の度合の發現である」（p. 80）。而して Turgot の解釋に依れば孤立の人間が諸物の比較に際し考慮に加ふる事項は、第一に現在焦眉の欲望に對する適合性であつて、彼れは之を「卓越性」と呼ぶ。第二に將來の欲望に對する適合性、即ち現在の享樂には何等寄與する所無きも尚之を所持する事に依つて將來の享樂に供し得可き資質であつて、彼れは之を「效用」と呼ぶ。第三には獲得の難易であつて、彼れは之を稀少性と同一視する。蓋し「同等に有用にして同等に卓越せる二物の間に於ては、其獲得に一層の困難を要する方を一層貴重なりとし、其確保に一層の苦慮努力を拂ふ可きは明瞭であ

る」。「水が有用なるに拘らず其量豐富なる國土に於ては貴重ならずとせられ、砂漠に於ては無限の價格を具ふる所以も爰に在る」。畢竟孤立の人間が諸物を比較して其重要性の等級を立つるに當り考慮の對象とする所は、前掲三條に歸着すると云ふのである（p. 82）。

然るに彼れは孤立の人間が各個の貨物の價値を秤量する共通の尺度如何を求むるに及んで、費用價値說の影響を曝露した。即ち彼れは此尺度を人間が其欲求する貨物を獲得する爲に、自然との原始的交渉に於て支拂はざる可からざる勞働と時間に見出した。先に鑑賞價値の一因獲得の困難は「其收受に一層の煩勞を要する物は一層貴重に感ずる」と云ふ理由よりして欲求の一誘因と看做されたが、今や此必要なる煩勞は價値の尺度となつて現はれる。自己の幸福に重要なるの故を以て孤立人が一物に賦與する評價は、彼れが其物の探求に拂ふ其勞働と其時間、或は此二者を一言に包括すれば、彼れの能力の定量に外ならず。換言すれば諸々の價値の比較測定の單位は人間の能力の全體であつて、個々の評價は此單位の分數である。之を要約すれば「凡ゆる價値の共通の尺度は人間なり」と云ふに歸すと云ふのである（p. 83）。思ふに如上の Turgot の解說は、「諸物の價格、即ち諸物と吾人の欲望との間に存する比率は、未だ確定せる尺度を有する事無し。されど恐らくは其一を發見し得可し。余の意見としては其は人間を措いて他に無しと信ず」と云へる Galiani の影響を示せるものである。但此言に依つて Turgot の眞に意味せる所は、個人的評價則ち其所謂鑑賞價値は各場合の自然的狀態の要求する個人的犧牲に依つて決定せらる。如何なる孤立の人間も其欲求する貨物に對して、彼れが其收得に支拂はざる可からざる努力に相當する以上の重要の程度を賦與する事無かる可しと云ふに在る。是れ明かに生產費價値說である。乍併 Turgot の所說の功績は實に生產費が先づ第一に欲望を制限する事に依つて、價格に影響する事を明示したる一點に存するものと云はねばならぬ（Sewall: Theory of Value before Adam Smith, p. 101）。

唯だ如上の縷說に基き吾人の看過し得ざる Turgot の缺陷は、彼れが價値と效用の兩觀念を混同せる一事である。即ち或は「欲望充足に適すと思惟せらるゝ限りに於て」物は價値を有すと云ひ、或は孤立人が其享樂に適すと認知したる適合性は獨立に之を價値と稱するを得と爲せるが如き、是れ明かに現代の效用に相當する觀念に代ふるに、直に價値なる用語を充當せるものである。其鄕國の先覺を頌揚するに急なる Turgeon は謂へらく、「初期英吉利經濟學者の大部分は使用價値と效用とを混同した。然るに Turgot は決して此無視を犯さなかつた。效用の發生する爲には孤立人が其便益の確保探求の際唯一の貨物の上に其能力を發揮するを以て足る。其物が自己の享樂に適すと云ふ判斷が之を效用あり utile と認定する。されど他物と比較するにあらざれば、此效用ある貨物は評價せられぬであらう。使用價値は幾多の效用有る貨物の間に行はるゝ撰擇を想はしむ。其は欲求の等級效用の比較を意味す」と（Turgeon: op. cit. pp. 373-374）。乍併此は Turgeon の善意の曲解である。之を吾人が Turgot の缺陷なりと認むる誤れる語法を以て修訂せしむれば、彼れは個々の價値の發生する爲には孤立人が唯一貨物の探求に努力するを以て足ると爲し、適欲性の認知は直に價値を生ずと爲し、使用價値即ち所謂鑑賞價値は幾多の價値ある貨物間の撰擇、價値

の比較を意味すと爲せるものである。畢竟彼れは使用價値以前に獨立の價値あるを明言してゐる。果して然らば彼れは效用と使用價値どころか既に效用と價値とを混同せるものと云ふ可きである。固より經濟科學樹立以前術語の用法未だ不備なりし當時を想はゞ、Turgot の此短所は必ずしも痛烈なる非難を加ふ可きにはあらずと雖も、然も現代の用語と彼此照應する時は、其缺點は缺點として決して依怙の曲辯を許さゞるものである。

八

次に Turgot は考察を「評定價値」則交換價値の問題に轉向し、錯綜を避くるが爲に絕海の孤島に棲息せる二人間の交換を假想して其說明の起點とする。其一人は魚の餘剩を有し他の一人は毛皮の餘剩を持つとせば、前者は寒冷を防ぐが爲に後者は饑餓を免るゝが爲に、相互に他の餘剩を需要し交換は爰に發生する。此場合從前無用なりし二物の餘剩部分は、其所有者の眼中に新たなる價値を以て映ずるに至り、各自は何等直接の欲求を持たざりし部分にも評價を行ふに至る。乍併恐らく此最初の例に於ては交換條件に關する論議には大なる波瀾無く、魚の餘剩の全部は皮の餘剩の全部と交換せられるであらう。然るに此假設を少しく變更して、一は魚の代りに長期の貯蔵に堪ゆる穀物を一は毛皮の代りに薪を所有し、且つ此孤島は穀物をも薪をも生產せず、更に嵐の如き不利なる事情の爲に大陸に渡りて兩者の供給を受くる事を阻止せらるとせよ。穀物の所有者は凍死より免るゝ爲に薪を欲求し薪の所有者は餓死より免るゝ爲に穀物を欲求し交換の必要甚大なるものありと雖、然も各自は其所有する物を保持するの利益と其所有せざる物を獲得するの利益とを先づ比較算定する。換言すれば各自が兩貨物夫々の自己に對する鑑賞價値を精密に決定する。同時に亦た各自は其所有する物を可及的多量に保持し然も其所有せざる物を可及的多量に獲得するの利益を想ふ。爰に於てか各自は自己の鑑賞價値を秘して其相手に可及的小量を供して可及的大量を收めん事を期す。必然兩者は交換の條件に關して議論を戰はし、然も兩者は協定を大なる利益とするが故に遂に一致を見るに至る。交換は爰に成立する。而して各自は疑も無く自己の手離せる物よりも自己の落手せる物に一層高き鑑賞價値を置く。「是れ交換の必須の要素唯一の動機である。蓋し交換に於て何等の個人的利益を發見せざるに於ては、各自は敢て之を行はざる可きを以てゞある」。思ふに斯くの如く Turgot が交換に於ては兩當事者が共に價値を利する所以を闡明せるは慥に時流を卓拔せる見解なりしも尙且つ此利得は單に鑑賞價値に關するのみに止り、兩當事者各々の利する度合は必ず均等なりとの謬想より脫離するを得なかつた。以爲らく、若し雙方の利する度合にして均等ならずとせば「一方は他よりも交換を欲する程度少く、爲に他を强制して一層多量を供給せしめ其價格を讓步せしむるであらう。故に此意味に於て兩當事者相互が等價に對して等價を與ふと云ふは常に嚴密に眞理である。即ち此二物は同等の交換價値を有す」と（P. 86）。

然らば鑑賞價値則使用價値と評定價値則交換價値との異同如何。鑑賞價値の決定に於ては各人が孤立に二個の利益を比較するに對し、評定價値の決定には尠くとも二人の比較する者があり四個の比較せらるゝ利益がある。乍併兩當事者各自の二個の利益は最初彼等に依つて單獨に比較せられ、然る後に其二個の結果が兩當事者

間の討議に上り其一致に依つて評定價値は成立する。換言すれば評定價値は鑑賞價値の平均に外ならざるものである。而して既述の如く「孤立の人間に對する一物の鑑賞價値が、彼れが此貨物の探求に寄與し得可き能力の部分と其全能力との間に於る比率に過ぎざる以上は、二人間の交換に於る評定價値は、其交換物件の獲得に彼等が寄與す可き能力の合計と彼等の全能力の合計との比率に過ぎぬ」。斯くて Turgot は鑑賞價値と評定價値との兩者を共に人間の精力に還元する事に依り、交換價値は個人的評價の結果に外ならざる所以を明示せるものである（pp. 86-87）。彼れは次に價格は交換價値表示の一便法に相違無きも、貨幣は決して其正確なる尺度にあらず。價値の唯一嚴正なる尺度は既述の如く人間の能力以外に之を求むる能はず。唯だ此能力詳言すれば諸物の獲得に要する勞働及時間はそれ自身秤量に困難なる事情あるを以て普通は現在の貨幣を價値の表示者たらしむるに過ぎざる旨を述べたる後、漸く交換の複雜なる場合に論歩を進むるに及んで其未定稿 "Valeurs et Monnaies" の筆を止め、其代表書 "Reflexions" に於ては鑑賞價値並に評定價値なる用語も見えず、又是れに相當する內容に精細なる演述を費す事も無く、僅に市場價値成立の經緯に若干の考察を挑へるのみである。

畢竟此國の價値論史上に致せる Turgot の貢献は、其到達したる結論よりも寧ろ其推理の過程に於て一層甚大なるものありと云はねばならぬ。彼れが David Hume に寄せたる書簡の一節に於て、「賃銀の大小を決定するは課税の高低にあらずして單に需要供給の關係のみと云へる學兄の觀察は洵に其當を得たり。此原理は慥に未だ曾て異論ありし事無し。其は一定の時期に於て商業上の價値を具有する一切諸物の價格を定むる唯一の原理なり。されど人は二種の價格、即ち需要供給の關係に依り成立する時價 le prix courant と基本價格 le prix fondamental とを區別せざる可からず。而して基本價格は物品の場合に於ては其物の勞働者に要したる費用、又賃銀の場合に於ては勞働者の生活資料が彼れに要したる費用なり」（Turgot: Reflections on the Formation and the Distribution of Riches, Economic Classics, Ashley's ed. Appendix, pp. 107-108）と明言せるは、疑も無く一派の生産費價値說と其結論を等しうする事を證示せるものである。洵に Galiani に於ては勞働は主として稀少性に作用するの故を以て價値に影響すと看做されしに反し、Turgot に於ては勞働は價値の基礎を占め、其は交換價値使用價値の兩者を通じて窮極の尺度であり窮極の決定因であると思惟せられた。乍併注目に價するは彼れが價値に關して敢て主觀客觀の差別を樹つる事無く、鑑賞價値則使用價値並に評定價値則交換價値は全く其性質を同じうし、兩者共に顯然主觀的なりし一事である。此主觀的傾向心意的解說こそ即ち後進を啓發して善正なる行路に轉向せしむる契機となつた。此趨勢を助長せるは Condillac である。

九

Étienne Bonnot de Condillac (1714-1780) の "Le Commerce et le Gouvernement, considérés relativement l'un à l'autre" は Adam Smith の「國富論」と等しく一七七六年上梓、Jevons の褒辯に從へば「恐らく價値と效用との眞の結合に關する最初の明確なる叙述」を包容せる好著である（Theory of Political Economy, Preface to 2d ed. p. xxviii）。乃ち同書第一編劈頭の一章を「諸

物の價値の基礎」と題し論じて曰く、「物に效用ありと云ふは其が吾人の何等かの欲望に役立つ時、效用なしと云ふは如何なる欲望にも役立たざる時或は吾人が之を以て何ものをも爲す能はざる時である。故に物の效用は吾人が是に關して抱ける欲望の上に其基礎を有す。此效用に準據して吾人は物を或は高く或は低く鑑賞する。換言すれば其吾人の用ひんと欲する使途に適合する程度如何を決定する。扨て此「鑑賞」こそ吾人が價値と呼ぶ所のものである。物に價値ありと云ふは其が何等かの使途に良く適合する事或は吾人が之を良く適合すと鑑賞する事である。かるが故に諸物の價値は其效用の上に、或は同一事に歸着するが吾人が是に關して抱ける欲望の上に、或は再び同一事に歸着するが吾人が之を以て行ふ用途の上に其基礎を有す」(Le Commerce et le Gouvernement—Collection Guillaumin, Mélanges d'Economie Politique, tom. I. pp. 250-251)。他方に於て物の「饒多なる時は缺乏の危惧無きが故に人は欲望を感ずる事少く、反對の理由に依り稀少窮迫の際は一層の欲望を感ず。然るに諸物の價値は欲望の上に其基礎を有する以上、強く感ぜらるゝ欲望が諸物に一層大なる價値を與へ、弱く感ぜらるゝ欲望が是に一層小なる價値を與ふるは當然である。かるが故に諸物の價値は稀少なる時增加し饒多なる時減少する。洵に饒多なる時に於ては價値は零點まで減ずる事すらあり得る。例へば過剩品の如き人が之を如何なる使途にも用ふる能はざる場合には常に價値を持たぬであらう。蓋し其際其は全然無效用なる可きを以てゞある」。故に「効用同等なりとせば價値の大小は、若し稀少饒多の程度を常に精密に知り得るならば專ら是れに基くであらう。然る時は人は各貨物の眞實なる價値を得るであらう。乍併此程度は決して測知するを得ないであらう。爰を以て價値の大小は其基礎を主として吾人が各貨物に就きて抱ける意見の中に有するものである」(Ibid. p. 252)。前言を反覆要約すれば「諸物の價値は效用に基くも其價値の大小は、效用同等なりとせば。其稀少又は饒多に、或は寧ろ其稀少及び饒多に關して有する吾人の意見に基くものである。余が效用同等なりとせばと云ふは、假に諸物が同等に稀少なるか或は同等に饒多なりと想定すれば、人は其價値の大小を彼れが其效用を或は高く或は低く判斷するに從つて決定す可きは、人の充分認むる所なるが故である」と(p. 253)。

畢竟 Condillac の見解は徹頭徹尾主觀的效用を以て價値の根源と爲すものである。唯だ此主觀的效用は吾人の欲求の緊急なるに從つて明確となり、更に此欲求の熱度に影響する限りに於てのみ稀少性が價値に關係する事を認容した。如上の眞意は彼れが種々なる異說に對して下せる論難を檢討する時、愈々明瞭に窺知する事が出來る。

乃ち先づ費用價値說を痛烈に搏擊して曰く、「諸物の中には例へば水の如く、甚だ必要なれども微塵も價値を有せざるやに見ゆるものあり。爰に於てか論者は云ふ、是れ其獲得に何等の費用を要せざるが故なり。而して其が運送に依り收受し得る價値は、物自體の價値にあらずして運搬の入費に外ならずと。乍併人が毫末も價値無き物を獲得する爲に運搬費を支辨するとは、奇怪なる事柄である。凡そ物は人の思惟する如く、費用を要するが故に價値を具ふるにあらずして、價値を具ふるが故に費用を掛けるのである。故に余は敢て云はん、河流の沿岸に於てすら水は一の價値を有す、但其處に於ては其

は吾人の欲望に對して無限に過剰なるが故に、其價値は可及的最小なるのみと。是れに反して旱魃の場所に於ては其は巨大なる價値を具有し、人は其獲得の距離及び困難に比例して之を評價する。斯かる場合渇したる旅人は一杯の水に對し百ルイをも與ふ可く、即ち此一杯の水は百ルイに價するであらう。故に價値は物の中に內在するにあらずして、寧ろ吾人が是れに關して行ふ鑑賞の中に存在し、此鑑賞は又吾人の欲望に對應し、欲望の增減に準じて增減するのである」と（p. 253）。而して彼れは費用とは啻に金錢上の支出のみならず勞働をも包含するものと看做し、勞働の意義は或る利益を取得せんが爲めの行爲又は行爲の繼續なりとし、此見解に立脚して河流の沿岸に於る水も之を掬する爲に膝まづく費用を要し、空氣も窓を開放して之を呼吸するの費用を要し、人が假令經營なりと雖も此費用を支拂ふを辭せざるは、是れ如何に些小にもせよ如上の水と空氣に價値の存する爲なりと見た（p. 254）。即ち Condillac に於ては費用は價値の原因にもあらず尺度にもあらず、却て其結果であり證驗であつたのである。

次に彼れは絕對的稀少性說にも亦不滿の意を明示する。曰く「論敵の或る一派は價値の基礎を效用に置くを以て大なる謬見なりとなし、凡そ物は一定程度の稀少性を具有するにあらざれば價値を生ずる能はずと云ふものあり。一定程度の稀少性、是れ余の理解し能はざる所である。吾人が其用途に對し充分に之を所有せずと判斷する時余は物が稀少なりと思惟し、吾人の欲求以上に所有すと判斷する時余は物が饒多なりと思惟す——畢竟余は人が之を以て何ものをも爲さず又爲す能はざる物は價値を有せずと信じ、是れに反して效用を具ふる時は價値を有すと信ず。而して其有用なる所以絕無なるものに在りては、稀少に於ても一層大なる價値を有する筈無く、饒多に於ても一層小なる價値を有する事無かる可し」と（pp. 254-255）。要するに「人は價値を以て絕對的性質と看做し、吾人の行ふ判斷に倚賴せず諸物に固有なりと思惟すれども、此混亂せる觀念こそ邪惡なる推理の根源である。故に吾人は固より諸物は之を吾人の使用に適當ならしむる所の性質を具備するにあらずんば價値を生ずる事無しと雖、然も若し吾人にして諸物が事實斯かる性質を具備すと判斷せざるに於ては、其は吾人に對して毫釐も價値を有せざる可きを記憶しなければならぬ。爰に於てか彼等の價値は主として吾人が彼等の效用に關して行ふ判斷中に存し、其價値の大小は吾人が其效用を或は高く或は低く判斷するに依り、若しくは效用同等なりとせば、吾人が其を一層稀少なりとか一層饒多なりとか判斷するに依つて生ずる」と云ふのである（p. 253）。

結局 Condillac の見解に從へば價値論解決の鍵鑰は、私的判斷に基く主觀的效用が其全部であつた。效用は主概念、稀少性は唯だ其從屬概念に過ぎなかつた。供給狀態其他諸般の外的事象も獨り人間の心意を通じてのみ價値に影響する所以を明示した。其結論推理共に Turgot 乃至 Galiani に比較し一層主觀的一層心意的に徹底して矛盾無かりしものと認めねばならぬ。

但一點吾人の許容するを得ざる Condillac の缺陷は、彼れが使用價値と交換價値との差別を全然閑却したる事實である。洵に其價値論の綱要の概して正鵠を穿ち得たるに近き Condillac が、夙に Quesnay 並に Turgot に依つて認識せられたる兩者の區別に、而して更に Abbé André Morellet (1727-1819) に依つて「效用無き所に

價値無し。されど價値はそれ以上の或るものである。人は是れに『交換性』echangeabilité なる名辭を賦與するを得ん」（Morellet: Prospectus d'un nouveau dictionnaire du commerce, 1789—Schelle, Vincent de Gournay, chap. XIII. p. 266）と高調せられたる緊要なる一點に、其透徹せる思索を以てして遂に毫末も言及する所無かりしは一奇である。諸他の難關に對しては其解說頗る明晳なる彼が、獨り經濟學上に所謂富たる資格の有無を決す可き經濟財と非經濟財との區劃に當つて甚だ曖昧に、河邊の水にも空氣にも共に價値ありと無雜作に論じ去れるは畢竟這般の重要なる區別を無視せる結果と云はねばならぬ。好個の論敵 Le Trosne が此點を摘發して其交換價値萬能の正系 Physiocrates の立場より、凡そ價値の領域に入るには「生産物は必ず交換の商量に上らざる可からず云々」（De l'intérêt social, —Collection Guillaumin, Physiocrates, tom. II. pp. 890-895）と論難せるは固より其所である。

十

進んで Condillac は第二章に於て價格本質論、第三章に於て價格變動論に直入する。先づ「余は小麥の過剩を所有して葡萄酒を缺き、反對に汝は葡萄酒の過剩を所有して小麥を缺き、而して余に無用なる小麥の過剩は汝に必要にして、且つ余自身は汝に過剩無用なる葡萄酒に對し欲望を有する」時、簡單なる場合に於ては相互に其の所有する餘剩の全部を提供す可く、然る時は「余は余の小麥の汝に價する所は、汝の葡萄酒の余に價する所に等しと思料し」汝亦た同斷なる可し。然るに事情複雜となり「余の過剩は汝の消費に充分なれども、汝の過剩は余の消費に充分ならずとせば、余は余の過剩全部を汝の過剩に對して與ふる事無かる可し。蓋し余の汝に讓渡す可きもの丶汝に價する所は、汝の余に讓渡するもの丶余に價する所よりも大なるを以てなり。故に余は余の小麥の過剩全部を汝に委する事無く、余の欲し汝の余に與ふるを得ざる葡萄酒の分量を他所より補給する爲に、其一部を保留す可し。汝は又汝の側に於て、必然其葡萄酒の過剩を以て其消費に必要なる小麥全部を獲得せんと欲す可く、爲に余の汝に讓渡せんとする小麥が汝に不充分なるに於ては、汝は余に其葡萄酒の過剩全部を委ねる事を拒否す可し。乃ち此折衝に於て汝は多量の小麥に對して與へ得るよりも少量の葡萄酒を余に供給せんとし、余は又多量の葡萄酒に對して與へ得るよりも少量の小麥を汝に供給せんとす可し。然るに一方に於て汝は小麥を必要とし余は葡萄酒を必要とするが故に、欲望は吾人に協定を必要とす可し。其際汝は余に余の欲求する葡萄酒の全量を與ふるの意志無く亦た與ふるを得ざるが故に、余は其少量の消費を爲す事に決意す可く、次に汝は汝の側に於て、小麥に就いて爲す可く算定せる消費の一部を節減す可し。爰に於て余は汝に小麥の一部を申出づ可く汝は余に葡萄酒の一部を申出づ可く、而して相互に幾多の申出を重ねたる後、吾人は始めて一致す可し。例へば吾人は一樽の葡萄酒と一 setier の小麥との交換に同意す可し。申出でありて相互に値切り、一致を見る時に取引行はる。其際吾人は一 setier の小麥の汝に價する所は、恰も一樽の葡萄酒の余に價する所に等しとの鑑賞を行ふ。斯く葡萄酒に對する關係に於て小麥に就き、又小麥に對する關係に於て葡萄酒に就き、吾人の行ふ鑑賞こそ即ち人の價格と名付くるものに外ならず。斯くの如くにして汝の一樽の葡萄酒は、余に取りて余の一 setier の小麥の價格あり、且つ余の一 setier の小麥は汝に取りて、汝の一樽の葡萄

酒の價格あるなり（Le Commerce et le Gouvernement—Collection Guillaumin, Melanges d'Économie Politique, tom. I. pp. 255-256）とて價格發生の經緯を論じたる後、「交換に於ては諸物は絶對的價格なるものを持つ事無し。其は吾人が取引を締結する瞬間に於て、是れに就いて行ふ鑑賞に基く所の相對的價格を有するのみ。而して彼等は相互に他の價格を成す」とて所謂內在價格なる觀念を排斥し、爰に立脚して價格の本質に言及し、「第一に諸物の價格は吾人が是れに就いて行ふ鑑賞に比例す。或は寧ろ其は吾人が他物との關係に於て一物に就いて行ふ鑑賞に外ならず。故に原始に於ては「價格」prix と「鑑賞」estime とは全然同義語にして、最初前者の意味せる觀念と今日後者の表示する觀念との相同じきは怪しむに足らず。第二に諸物は相互に他の價格を成す。即ち前例に於て余の小麥は汝の葡萄酒の價格にして汝の葡萄酒は余の小麥の價格なり。蓋し吾人の間に締結せられたる取引に依り、吾人は余の小麥は汝に對して汝の葡萄酒が余に對すると同價値を有すと看做す事に一致せるが故である」と斷じてゐる（p. 257）。

彼れは更に進んで價格と價値との決して混同す可からざるを切言し、「吾人が一物に就いて欲望を有するや否や其は價値を有す。其は唯だ此事あるに依つてのみ價値を有し、而して其は交換の行はるゝと否とを問はず。是れに反して物が價格を持つは唯だ交換に於てのみ。如何となれば吾人が交換の欲望を抱かぬ限り、一物を他物との比較に於て鑑賞する事無ければなり」（p. 257）とて、畢竟「欲望は價値を與へ交換は價格を與ふる」事を述べてゐる。Turgeon が「Condillac は交換價値と價格とを鮮明に區別する事無し。實の所彼れは價値に就きては唯だ一あるを知るのみに似たり。使用價値即ち是れなり。價格に關しては彼れは之を交換當事者間の「折衝」altercation の所產と解するのみ。此空隙は幸ひ最初 Quesnay に依り、次に Morellet に依り、而して就中交換價値を正しき地位に置ける Turgot に依つて塡補せられたり」（Valeur d'apres les Économistes Anglais et Français, pp. 376-377）と云へる批判は、之を如上の言說に徵するも異議無く首肯せざる可からず。

次に Condillac は價格の基礎たる價値に變動ある以上は價格にも亦た當然變動ある可きを述べ、其變動の原因雜多なれども就中主要なるものとして二條項を列擧する。第一に「饒多及び稀少が價値と共に價格を變動せしめ、更に其變動が欲求の大小に比例するは明瞭である」。第二は「一物を交換せんと欲する人員と他物を交換せんと欲する人員との相互間に於る比率の變化である。即ち多數の人々が或る貨物の交換を欲求する時は其競爭は價格を低落せしめ、競爭の缺除は彼等の交附せんと欲する貨物の價格を騰貴せしむ。畢竟或は一方の側に於て、或は他方の側に於て。競爭の大なるか小なるか又は絶無なるかに從ひ、價格は交互に高低す」と云ふのである（pp. 257-258）。

尙彼れは第六章に進みて正系 Physiocrates の持論に反對し、商業も亦た能く富を生產し得る所以を力說する。富とは彼れに從へば「價値を具有する諸物の饒多なる事、或は同一事に歸着するが、吾人がそれに對して欲望を抱くが故に效用ある諸物の饒多なる事、結局、再び同一事に歸着するが、一言にして之を云へば吾人の使用に役立つ諸物の饒多なる事に依つて成る」（p. 266）而して「交換に於ては人は等價に對し等價を與ふと云ふは虛僞である。反對に契約者各

自は常に大なる價値に對して小なる價値を與ふ――若し人が常に等價に對して等價を交換するものとせば、契約者の孰れに對しても利得は發生せざる可し。扨て契約兩當事者が共に利得を得又は得るに相違無きは何故なる乎。是れ諸物は吾人の欲望に相對的なる價値を有し、吾人の欲望は相互に一物に大にして他物に小なる爲である。此問題に就いて人の陷る錯誤の據つて來る所は、商業上に取扱はるゝ諸物が宛も絶對的なる價値を有するが如くに云爲し、其結果交換を行ふ者は相互に等價に對して等價を與ふるを以て公正なりと判斷するに基く。兩當事者相互が大なる價値に對して小なる價値を與ふる事に注意せず、人は多大の省察を拂ふ事無くして、斯くの如きは有り得ざる事なりと思料し、一人が常に小なる價値を與ふる爲には他の一人が常に大なる價値を與ふるの迂愚を爲さゞる可からず。（既に此缺陷あり。彼れらず。是れ人の首肯し得ざる所と思惟するに依る。乍併吾人が賣却に供すと看做さるゝは、吾人の消費に必要なる諸物にあらず。其は余の屢々記せる如くに吾人の過剩品なり。吾人は吾人に無用なる一物を交付し、以て吾人に必要なる一物を獲得せんとす。即ち吾人は大なる價値に對して小なる價値を與ふるものなり」。見る可し。交換に於ては富ならざりし物が富と化し、斯くして商業は富を增加すと（pp. 267-268）。

思ふに如上の所說は其結論にのみ着眼する時は、富の生產を以て唯だ農耕にのみ限局せる Physiocrates の偏見に優越する事萬々なれども、然も斯くの如く見解の乖離を導ける根柢には Physiocrates が專ら交換價値を中心に立論せるに反し、Condillac が價値には單に使用價値あるを以て交換價値あるを見ざりし事實の潛在せるを記憶せざる可からず。既に此缺陷あり。彼れが縷々 Physiocrates の持論に加へたる搏擊も結局標的を逸せる空矢となり、未だ其迷妄を覺醒せしむるに至らざりしは固より自然の歸趨であつた。以之觀之彼れの所說は、交換に於る價値の贏得を單に使用價値のみに限りて交換價値にまで擴張するを躊躇したる Turgot の所說に、果たして實質上幾許の進步を示せるや。聊か疑ひ無きを得ず。畢竟 Condillac の功績は、價値の解釋に關して Turgot よりも一層明晳透徹せる純主觀的純心意的立場を詳述し以て後進を Cantillon 流の邪曲の影響より完全に匡救せる點に在る。

以上は發端創始の時代を彩る客觀主觀兩學說對峙の大樣である。大勢は軈て後說に歸嚮する。Turgeon は曰く「Quesnay の意見、Morellet の辛苦、彼等は遂に認められざるがまゝに過ぎ去れるや否や。吾人之を知らず。Turgot 及び Condillac の著作、彼等は佛蘭西に於る價値觀念の進路に何等影響を及ぼす所無かりしや。余之を信ずる能はず」と（Valeur d'apres les Économistes Anglais et Français, p. 379）。其は J. B. Say の出現と共に展開し行く第二期の發達に徵して知る可きのみ。（未完）。

生產的及び不生產的なる語に就て（二）

榎本鑛治

九

前號に紹介したる所は、ジョン・スチュアート・ミルが彼の「經濟學上未定の諸問題」第三論中に論述せる見解の大要であるが、轉じて彼の大著「經濟學原理」中に生產的及び不生產的なる語を